

村の子戦争体験記

八女郡矢部村 原嶋 正喜

奥八女地方の山々突辺を、擦れ擦れに轟音を発し飛来する最新自衛隊機ジェット機の爆音に、終戦間際、米国の巨大なB29爆撃機空襲のエンジン恐怖音が、今年58才の柚男の脳裏を掠める。

私の生れ育った矢部村は、生活物資に乏しくとも、矢部川源流地より溢れる水と、草木実や葛根くずなどに恵まれていた。農地は石垣段々田畑に山焼畑耕作の自給自足の生活であった。

鬼塚区は往環通り（現在国道422号）、旧道は日向神ダムで水没している。そこには黒木警察署矢部駐在所や木材工場などがあつた。私の家も同じ隣組で、隣近所で防空壕掘りがなされた。子供心に何か無気味な予感を抱き、どうしてこんな山奥でと思った。

父は家族8人の生計のため、急に馬車引きを始めた。家は更に忙しくなつた。私はうさぎ、にわとり、牛の世話と子守をし、遊ぶことはなくただ小川で小魚を捕る程度で、母は養蚕や農作業で、母の眠っている姿は見たことはなかつた。

父も慣れない馬車引き作業で良馬に恵まれず苦勞をしていた。毎日のように矢部奥山の細道より、町村の製材所など砂利道を杉大木を運んでいた。道端の駐在所並びの堀川バス会社鬼塚バス停に、駄菓子と一杯飲屋の弥太じいさんの店があり、アキしゃんばあさんは小柄で愛嬌がよく、それに戦地に出兵している息子の嫁さんが美人でもあり、毎度店前には5、6台の木材積んだ馬車と引男の休憩地でもあつた。馬に食（はみ）を与え、男達は一杯飲んでいた。「一пей飲もうか三平…」、「それもよかろう」要蔵さんの流行言は学校の子供達までも有名であつた。ほっとする仄かな一時であつた。馬車が出た後は馬糞一つ残らなかつた。父も漸く賢い栗毛を手に入れ、馬の世話に余念がなかつた。それから半年も経つたろうか、愛馬は軍馬に徴発を受け、福岡まで送り届けた。

父はあまりの落胆に、馬車引き業を止めてしまった。駐在所車側の電柱注入場跡の広場には、兵隊さんが軍馬50頭位で行軍し野営され、その都度家よりの出兵馬は来ていないかと、暗くなるまで探し続けたのは小学校2年生頃であつたろう。

それから間もなくの暑い真夏に、敗戦終結の知らせが製材所工場長宅のラジオで告げられ、村の人々は異様な雰囲気と安堵感でもあつたろうか、子供心には察することはできなかつた。続くように祖父竹次郎は他界し、葬儀は僅かな濁酒で弔いがなされた。

山村にも進駐軍アメリカ兵が、上陸両襲艇や大型トラック、ジープの武装した車でやってきた。初めて見る外人に驚くばかりであつた。大人達は警戒して寄りつかなかつた。近くの警察駐在所は進駐軍立ち寄り所であつたので、子供達は恐れ恐れ近づくことにした。金髪のアメリカ兵士が一行に並ばせ、道路添いの川へ小石を投げさせ、一人一人にチョコレート、乾パン、ガムなど分け与えてくれた。初めて口にする甘味のその旨さは忘れられない。時々巡回の都度に、我々小人は素足同然で群がって物を貰つた。アメリカの家には車1台有るとの噂さに誰も

信じなかった。

村では日ごとに食糧難は厳しさをましていった。町、都会から疎開者の人達を受け入れ、肥料はなく、耕作地の狭い寒山村の食糧は乏しくなるばかりの中、一助の救いは、山の幸、川の幸であったが、それも一時的な飢えを凌ぐ物しかない。いつからともなく村の人々は、竹編み背負い籠（矢部てぼ）で、早朝より県境の山を二つ越えて肥後の地へヤミ芋を買い出しに出かけた。乗物はなく二足の草履をはき崩し、列して暗闇に帰宅される日々は続いた。子供達は栄養失調や病気などで倒れていった人も少なくはなかった。

当時の学校生活状況を記述しておきたい。昭和16年4月、矢部村大火発生し、住宅、役場、学校、郵便局、お宮など焼失し、先輩達は暫く野外大樹下や民家の軒先などでの勉強だったと言う。

私は昭和19年4月、古い校舎の飯干国民学校新1年生46名入学した。受け持ちは、若い荒川道子先生で、いろいろお世話になった。既に上級生は新築の矢部校と合併していた。後で兄達と一緒にになった。

山村でも世界大戦は慌ただしくなっていた。特に若い男の先生は、次々と千人針と日の丸の小旗で戦地へと見送られていった。先生の中には、最後の自分の教えかと熱狂された。その後、状況は悪くなり授業時間はなく、勤労奉仕で上級生は奥山から木炭、杉皮の運び出し、松明用松根掘り、松脂採集や出征農家の手伝いと配置された。また、竹槍、女子は防空頭巾に木長刀や防火訓練の雄姿は頼もしく思えた。低学年生は、稲の落穂拾い、芋つるとり、また木実拾いなどいろいろさせられていたが、まもなくして矢部にも空襲警報が発せられ、学校の裏山の孟宗竹岩山に隠れ、上空の真白なB29米国爆撃機が去るのを待った。

ここに竹槍と飛行戦の終結を見ることになる。集落の警報単鐘の鐘は静まり、暫くの空白はあったものの、外地からの引揚げや都会よりの疎開、復員先生や軍よりの払い下げの木炭車トラック国産車が走るようになり、騒々しくなったが、電気は線香停電で代用の灯りで不自由な暮しの上に村民は飢えていた。特に疎開の友達は弁当持参できず、昼食時はいつの間にか姿はなかった。復員の先生は兵隊用の大きな金弁当箱に麦飯を児童に分け与えられたが、それも食べなかった。山の水でも飲んで飢えを凌いでいたのだろうか、悲しい時代であった。

いつしか疎開の友は町へ帰りつつあった。学校5年生の春、元青年学校々舎に全学年101名の児童は飯干校で授業が再開始された。6年生に成り、また苦勞をせねばならなかった。教員住宅造りなどに使われ、加えて男の先生の食べ物の調達を強いることをさせられた。ある時は芋類、小鳥ヒヨドリなど誰ともなく持ってきた。それを教室後方の生徒用の大きい箱火鉢で羽根毛を巻り、一人焼いてよく喰っていた。奥さんが病気のため、授業らしき時間は殆ど無い儘で卒業式をせねばならなかった。

人が狂った戦争は、矢部山奥の人も先生も、特に子供においてもあまりにも犠牲は大きかった。終戦50年、今回も平成7年4月13日桜満開時、矢部村主催で本村出身者戦没者殉職者追悼式が行われた。本村戦死者数148柱、戦争未亡人は老い、子は孫の成長を楽しみにしている。何もなかったかのように。忘れたかのように。そして、矢部川の流れのように……。